

埼玉育ちのグローバル人

川口発国連行き珍道中

第3回「ジュネーブ編」

天野 晟さん



皆さんこんにちは。

2月のヨーロッパの風物詩、カーニバルを観ながら
（「ルツェルン」「ファスナハト」で検索）、第3回
をお送りいたします。

（1）「何者」かになれた私

第2回でお話したとおり、就職活動で大きく躓いた私は、職業教育や人材のミスマッチ防止の重要性を誰よりも痛感し、「誰もが自己有用感を感じながら働くことができる社会」の在り方を考え続けたいと思って、日本国内の労働政策に従事することになります。国連で働くことは諦めており、私の特殊な経歴を面白いと受け入れてくれた組織に骨を埋めるぞ！と、がむしゃらに数年働きました。

転機となったのは、それまでの常識がどんどん通用しなくなり、労働政策にも変革が求められたコロナ禍でした。欧米諸国の制度改正のスピードはとにかく凄まじく、私は偶然にも、海外の好事例を調査する仕事を任されました。自分が作成した資料が実際に国内の制度改正に役立った時はとてもやりがいを感じました。また、コロナ禍を経て、これまで短所ばかり注目されていた、新卒一括採用やメンバーシップ型雇用という日本の伝統的労働慣行の価値が見直されることとなり、労働政策は各国の文化背景・社会制度によってアプローチが大きく変わることを再認識しました。

この経験から、世界の好事例が集約する国際労働機関で働くこと、日本のプレゼンスを向上し、アジ

ア諸国での労働環境改善に貢献してみたいな、と考えるようになりました。

いつか働けたらいいな～と思っていたところ、ひょんなことから外務省が実施している JPO 試験に挑戦することとなり、気がつけば 2023 年 1 月、私はジュネーブにいました。学生時代あんなに苦勞して、何もうまくいかなくて、手が届かなかった場所に、意図しないタイミングで届いてしまった。ILO からオファーレターが届いたとき、全く実感が湧きませんでした。チャンスは備えあるところに訪れる、というパスツールの格言をふと思い出したものです。国連で働きたいという夢こそ「急がば回れ」だったのだなぁと実感しました。

（2）ジュネーブという街

皆さんはジュネーブという街にどのような印象を持っていますか？欧州国連本部、高級時計、都会的なイメージを抱く方も多いのではないのでしょうか。3回目の海外、酸いも甘いも噛み分けるグローバル人としてこの地に降り立った私はここでもまた、衝撃を受けます。

ジュネーブは、確かに国際的でアジア人への偏見も少なく、交通機関も時間通り、郵便もきちんと届く、日本人にとっては違和感なく住みやすい場所ですが、レマン湖沿いで自然豊か、時の流れが穏やかな地方都市の一面も持ち合わせています。地元民がパリでフランス語を使うと、訛りとゆっくりした話し方から「ジュネーブから来たの？」と当

てられることもあるそうです。

基本的に毎日19時にはオフィスには人は殆ど残っていません。イースター、夏休み、クリスマスは長期休暇を取り、冬は山でスキー、夏は湖水浴やバーベキューなど、家族の時間を大事に過ごします。東京砂漠で昼も夜も忘れて働いていた私は、突然湧いたプライベートの時間に戸惑いました。

「働きがいのある人間らしい仕事」をミッションとするILOで、仕事だけが自己実現できる手段ではないという当たり前のことに気づかされました。



世界各国から集まった研修メンバーと



国際女性デーで企画したイベントにて

(3) すべての道は国連に通ず

実際に働いてみると、この組織には労働関係の専門家以外に、人事、IT、統計、調達、政策評価、国際儀礼など多岐にわたる専門家がいることがわかりました。夢を叶えるまで20年超、これまで色

んな道を歩んできた私ですが、「国連で働くため」を意図していた・していなかったに関わらず、自分の価値観を形成してきたという点では、どの経験も全て今に繋がっている気がします。繰り返しになりますが、国連で働くことはゴールではなく、あくまでも手段にすぎません。自分がパッションを持ち続けられる分野で経験を積み、その道で唯一無二の存在になれたと自信を持てたときにはもう、国連で活躍できる人材になれているのです。

こんな私も、今ではジェンダーの専門家として各国の支援計画や他部署のレポートに偉そうにコメントを付けています。国連専門機関、関連機関、さらに事務局などを含めれば自分の専門性にかっちりハマる場所は必ずあるはずです。私としては、一人でも多く邦人職員が増えることが、国際機関自体の多様性を高め、より柔軟で強靱な国際社会の実現に繋がると考えていますので、少しでも関心のある方の背中を全力で押したいと思います。

最後にはなりますが、拙稿ながらここまで読んでくださった皆様に心から感謝し、スイスの美しい山の写真をお裾分けいたします。



スイス三大名峰アイガー、メンヒ、ユングフラウ

※ここでの掲載内容は私自身の見解であり、必ずしも所属する組織の立場、戦略、意見を代表するものではありません。